

藤田医科対策 物理問題1 100点

1 解答 (1)  $F + \frac{T}{2} = Mg$  (2)  $\frac{T}{2}l - Mg\frac{l}{2} = 0$  (3)  $T = Mg, F = \frac{Mg}{2}$

(4)  $\frac{3}{4}l$

(1) 1 図より  $F + T\sin 30^\circ = Mg$

ゆえに  $F + \frac{T}{2} = Mg$

(2) 反時計まわりの力のモーメントを正として

$$T\sin 30^\circ \times l - Mg \cdot \frac{l}{2} = 0$$

ゆえに  $\frac{T}{2}l - Mg\frac{l}{2} = 0$

(3) (2)より  $T = Mg$

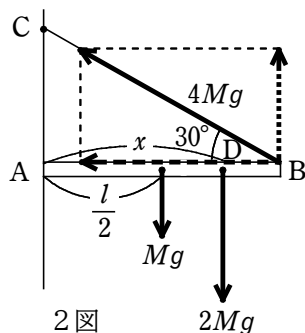
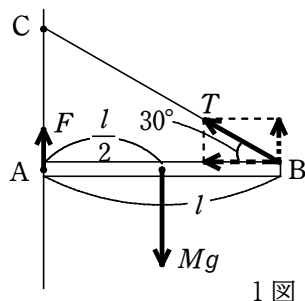
これを(1)の式に代入して  $F + \frac{Mg}{2} = Mg$

ゆえに  $F = \frac{Mg}{2}$

(4)  $AD = x$  とする。2 図より、A 点のまわりの力のモーメントのつりあいの式は

$$4Mg\sin 30^\circ \cdot l - Mg \cdot \frac{l}{2} - 2Mgx = 0$$

ゆえに  $x = \frac{3}{4}l$



2 解答 (1)  $\frac{p_0V_0}{R}$  [K] (2)  $T_B = \frac{7p_0V_0}{3R}$  [K],  $p_B = \frac{7}{3}p_0$  [Pa]

(3)  $T_C = \frac{59p_0V_0}{15R}$  [K],  $V_C = \frac{59}{35}V_0$  [m<sup>3</sup>] (4)  $\frac{17}{10}p_0V_0$  [J] (5)  $\frac{9}{2}p_0V_0$  [J]

(6) 0.25

(1) 状態 A における理想気体の状態方程式は「 $pV = nRT$ 」より

$$p_0V_0 = RT_A \quad \text{よって} \quad T_A = \frac{p_0V_0}{R} \text{ [K]}$$

(2) 状態 A → 状態 B は定積変化であるので、気体のした仕事  $W_{\text{したAB}}$  は  $W_{\text{したAB}} = 0$  J である。問題文より、 $Q_{AB} = 2p_0V_0$  [J]。1 mol の単原子分子理想気体の内部エネルギー  $U$  は「 $U = \frac{3}{2}RT$ 」で表されるから、その変化  $\Delta U$  は「 $\Delta U = \frac{3}{2}R\Delta T$ 」となる。

$$\text{よって} \quad \Delta U_{AB} = \frac{3}{2}R(T_B - T_A) = \frac{3}{2}R\left(T_B - \frac{p_0V_0}{R}\right)$$

熱力学第一法則「 $\Delta U = Q + W_{\text{された}} = Q + (-W_{\text{した}})$ 」より

$$\Delta U_{AB} = Q_{AB} + (-W_{\text{したAB}})$$

$$\frac{3}{2}R\left(T_B - \frac{p_0 V_0}{R}\right) = 2p_0 V_0 - 0$$

$$\text{よって } T_B = \frac{4p_0 V_0}{3R} + \frac{p_0 V_0}{R} = \frac{7p_0 V_0}{3R} \text{ [K]} = \frac{7}{3}T_A$$

$$\text{ボイル・シャルルの法則より } \frac{p_0 V_0}{T_A} = \frac{p_B V_0}{T_B}$$

$$\text{ゆえに } p_B = \frac{T_B}{T_A} p_0 = \frac{\frac{7}{3}T_A}{T_A} p_0 = \frac{7}{3}p_0 \text{ [Pa]}$$

(3) 状態 B → 状態 C は等圧変化である。気体のした仕事  $W_{\text{した}}$  は「 $W_{\text{した}} = p\Delta V$ 」と表される。

$$W_{\text{したBC}} = p_B \Delta V_{BC} = p_B (V_C - V_B) = \frac{7}{3}p_0 (V_C - V_0)$$

1 mol の単原子分子理想気体の内部エネルギーの変化  $\Delta U$  を圧力  $p$ 、体積  $V$  で表すと

$$\left[ \Delta U = \frac{3}{2}R\Delta T = \frac{3}{2}R(T_{\text{後}} - T_{\text{前}}) = \frac{3}{2}p_{\text{後}}V_{\text{後}} - \frac{3}{2}p_{\text{前}}V_{\text{前}} \right]$$

となる。よって

$$\begin{aligned} \Delta U_{BC} &= \frac{3}{2}p_C V_C - \frac{3}{2}p_B V_B = \frac{3}{2}p_B V_C - \frac{3}{2}p_B V_B \\ &= \frac{3}{2}p_B (V_C - V_B) = \frac{7}{2}p_0 (V_C - V_0) \end{aligned}$$

問題文より  $Q_{BC} = 4p_0 V_0$  [J]。

熱力学第一法則より  $\Delta U_{BC} = Q_{BC} + (-W_{\text{したBC}})$

$$\frac{7}{2}p_0 (V_C - V_0) = 4p_0 V_0 + \left\{ -\frac{7}{3}p_0 (V_C - V_0) \right\}$$

$$\frac{35}{6}p_0 (V_C - V_0) = 4p_0 V_0$$

$$\text{ゆえに } V_C = \frac{24}{35}V_0 + V_0 = \frac{59}{35}V_0 \text{ [m}^3\text{]}$$

$$\text{シャルルの法則より } \frac{V_0}{T_B} = \frac{V_C}{T_C}$$

$$\text{したがって } T_C = \frac{V_C}{V_0} T_B = \frac{\frac{59}{35}V_0}{V_0} \cdot \frac{7p_0 V_0}{3R} = \frac{59p_0 V_0}{15R} \text{ [K]}$$

(4) 状態 C → 状態 D は断熱変化であるので、 $Q_{CD} = 0$  である。単原子分子理想気体の内部エネルギーの変化  $\Delta U$  の式より

$$\begin{aligned} \Delta U_{CD} &= \frac{3}{2}p_D V_D - \frac{3}{2}p_C V_C \\ &= \frac{3}{2}p_0 V_D - \frac{3}{2}p_B V_C \\ &= \frac{3}{2}p_0 \cdot \frac{14}{5}V_0 - \frac{3}{2} \cdot \frac{7}{3}p_0 \cdot \frac{59}{35}V_0 \end{aligned}$$

$$= \left( \frac{42}{10} - \frac{59}{10} \right) p_0 V_0 = -\frac{17}{10} p_0 V_0$$

熱力学第一法則より  $\Delta U_{CD} = Q_{CD} + (-W_{したCD})$

$$-\frac{17}{10} p_0 V_0 = 0 - W_{したCD}$$

よって  $W_{したCD} = \frac{17}{10} p_0 V_0$  [J]

(5) 状態 D → 状態 A は等圧変化である。状態 B → 状態 C と同様に計算をする。

$$W_{したDA} = p_0(V_A - V_D) = p_0 \left( V_0 - \frac{14}{5} V_0 \right)$$

$$= -\frac{9}{5} p_0 V_0$$
 [J]

$$\Delta U_{DA} = \frac{3}{2} p_A V_A - \frac{3}{2} p_D V_D$$

$$= \frac{3}{2} p_0 V_0 - \frac{3}{2} p_0 \cdot \frac{14}{5} V_0$$

$$= \frac{3}{2} p_0 V_0 - \frac{21}{5} p_0 V_0 = -\frac{27}{10} p_0 V_0$$
 [J]

熱力学第一法則より  $\Delta U_{DA} = Q_{DA} + (-W_{したDA})$

$$Q_{DA} = \Delta U_{DA} + W_{したDA}$$

$$= \left( -\frac{27}{10} p_0 V_0 \right) + \left( -\frac{9}{5} p_0 V_0 \right)$$

$$= -\frac{9}{2} p_0 V_0$$
 [J]

この - は放熱を意味する。求める答えは外に捨てた熱量なので

$$Q = \frac{9}{2} p_0 V_0$$
 [J]

(6) 1 サイクルで気体がした仕事  $W_{した}$  は

$$W_{した} = W_{したAB} + W_{したBC} + W_{したCD} + W_{したDA}$$

$$= 0 + \frac{7}{3} p_0 \left( \frac{59}{35} V_0 - V_0 \right) + \frac{17}{10} p_0 V_0 + \left( -\frac{9}{5} p_0 V_0 \right)$$

$$= \frac{8}{5} p_0 V_0 + \frac{17}{10} p_0 V_0 - \frac{9}{5} p_0 V_0$$

$$= \frac{3}{2} p_0 V_0$$

気体が熱を吸収した状態変化は、A → B と B → C である。

$$Q_{吸収} = Q_{AB} + Q_{BC} = 2p_0 V_0 + 4p_0 V_0 = 6p_0 V_0$$
 [J]

熱効率の式「 $e = \frac{W_{した}}{Q_{吸収}}$ 」より

$$e = \frac{W_{した}}{Q_{吸収}} = \frac{\frac{3}{2} p_0 V_0}{6p_0 V_0} = \frac{3}{2} \times \frac{1}{6} = \frac{1}{4} = 0.25$$

3

【解答】 (1) (ア) 陽子 (イ) 中性子 (ウ) 原子番号 (エ) 質量数 (核子数)

(2) 4個 (3) 88 (4)  $4.8 \times 10^3$  年後

(5) (a) 1の軌跡

(b)  $\alpha$  粒子が磁場から受けるローレンツ力の向きと  $\vec{v}$  はつねに垂直のため、 $\vec{v}$  の大きさは変化せず、 $\alpha$  粒子は磁場に垂直な面内で等速円運動を行う。 $\alpha$  粒子の質量を  $m$ 、軌道半径を  $r$  とすると、運動方程式は

$$m \frac{v^2}{r} = qvB \quad \text{よって} \quad v = \frac{qrB}{m}$$

$\alpha$  粒子の運動エネルギーは

$$K = \frac{1}{2}mv^2 = \frac{1}{2}m \left( \frac{qrB}{m} \right)^2 = \frac{q^2 r^2 B^2}{2m}$$

$$\text{したがって} \quad r = \frac{\sqrt{2m}}{qB} \cdot \sqrt{K}$$

よって、半径  $r$  は運動エネルギーの平方根に比例する。

不安定な原子核は放射性崩壊をして別の原子核に変化する。崩壊の種類による、原子核の変化の違いを確認しておく。

放出するもの	質量数	原子番号
$\alpha$ 粒子	4 減	2 減
$\beta$ 粒子	変わらず	1 増
$\gamma$ 線	変わらず	

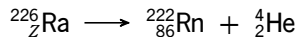
原子核崩壊は、周囲の圧力、温度に関係なく、各原子核の種類により一定の確率的な

壊れ方をする。 $N_0$  個の原子核が時間  $t$  後に残存している数  $N$  は  $N = N_0 \left( \frac{1}{2} \right)^{\frac{t}{T}}$  で表され、 $T$  を半減期という。

(1) (ア) 陽子 (イ) 中性子 (ウ) 原子番号 (エ) 質量数 (核子数)

(2)  $\alpha$  粒子はヘリウムの原子核 ( ${}^4_2\text{He}$ ) であるから、核子数は 4。

(3) 原子核反応では、反応の前後で質量数の和、原子番号の和が保存されるので



より  $Z = 86 + 2$  よって  $Z = 88$

(4)  $N = N_0 \left( \frac{1}{2} \right)^{\frac{t}{T}}$  より、 $N = \frac{1}{8} N_0$  となる  $t$  であるから

$$\frac{1}{8} N_0 = N_0 \left( \frac{1}{2} \right)^{\frac{t}{T}}$$

$$\left( \frac{1}{2} \right)^3 = \left( \frac{1}{2} \right)^{\frac{t}{T}} \quad \text{よって} \quad \frac{t}{T} = 3$$

$$t = 3T = 3 \times 1.6 \times 10^3 = 4.8 \times 10^3 \text{ (年)}$$

(5) (a)  $\alpha$  粒子は正電荷なので、磁場中で受けるローレンツ力は図の向きになる。よって、1の軌跡のようになる。

(b)  $\alpha$  粒子の電荷を  $q$  ( $q > 0$ ) とすると、ローレンツ力の大きさは  $f = qvB$

$\vec{f}$  と  $\vec{v}$  はつねに垂直のため、 $\vec{v}$  の大きさは変化せず、 $\alpha$  粒子は磁場に垂直な面内で等速円運動を行う。 $\alpha$  粒子の質量を  $m$ 、軌道半径を  $r$  とすると、運動方程式は

$$m \frac{v^2}{r} = qvB \quad v = \frac{qrB}{m}$$

$\alpha$  粒子の運動エネルギーは

$$K = \frac{1}{2} m v^2 = \frac{1}{2} m \left( \frac{qrB}{m} \right)^2 = \frac{q^2 r^2 B^2}{2m}$$

したがって  $r = \frac{\sqrt{2m}}{qB} \cdot \sqrt{K}$

よって、半径  $r$  は運動エネルギーの平方根に比例する。

